

ルカによる福音書6章1-11節 「安息日と新しい秩序」

1A 弟子たちの穂摘み 1-5

2A 右手の萎え 6-11

アウトライン

ルカによる福音書6章を開いてください。今日は11節まで学んでみたいと思います。

私たちは今、イエス様の宣教について読んでいっています。イエス様がこの世に来られて、なんの使命があったかという、ナザレの会堂で引用されたイザヤ書の言葉です。「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。(4:18-19)」貧しい人への福音です。そして、捕らわれ人に罪の赦しを与えます。目の見えぬ人に目が開かれることを与えてくださいます。そして自由にします。

ここに、「わたしに油を注がれた」とあります。これは神が任命し、この方を、人々を解放して、新しい神の国の中に導き入れるキリストとして、権威を与えておられるということです。解放者としての権威と力を持っておられます。そして、これを福音によって、つまり御言葉を教えることによって行います。それから、具体的に捕らわれた人々を解き放つことによって行われます。

そうした働きを、私たちは4章から見ることができました。イエス様が会堂で教えられていた時、悪霊につかれている人がいて追い出されました。その御言葉に権威があることが、示されました。ペテロの姑の熱を直されました。その他の数多くの病人を治されました。そして今度は、弟子たちを呼び出される時にも、その解放する権威を行使されました。ペテロに対して、その誇りとする漁で一晩中とれないようにし、イエス様が網を降ろしなさいと言われたその言葉によって、大漁になったことによって示されました。

そしてイエス様は、律法の中にも権威を示されました。らい病人に触れて、清められて、それから祭司に見せて証しをしなさいと言われました。律法は、清められた後の儀式は教えていますが、きよめられる力は与えていなかったけれども、イエス様は律法を成就することがおできになりました。

そして、中風の者に対する癒しです。イエス様は、「あなたの罪は赦されました。」と言われたところ、「神のほかに、だれが罪を赦すことができようか。」と律法学者、パリサイ人たちが思ったところ、「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに悟らせるために。(5:24)」と言われました。そしてその中風の者を起き上がらせました。病を治すところだけでなく、罪を赦すとこ

ろに権威をお示しになったのです。このことが、新しい時代の幕開けです。悪霊を追い出し、病を直される方だけでなく、何よりも神のみができる罪を赦す権威が現れ、人々を解放したのです。

ここら辺から、イエスによる解放をもたらす新しい秩序と、従来のしきたりに基づく古い秩序との確執が始まります。取税人マタイをイエス様は召されました。そしてマタイは、その仲間の取税人を自分の家に招いて、イエス様といっしょに食事をしました。それをパリサイ人や律法学者が見て、「取税人や罪人といっしょに飲み食いしている。」と責めました。もうこれは、律法に熱心なまじめなユダヤ人にとっては、あってはならないことでした。食事をすることは、当時は親密な交わりをすること、一つになることと同じであったからです。パリサイ派の人たちは、汚れとの分離によって神の前にきよいという信仰を持ち、異邦人との交わりは汚れをもたらす最大のものであったからです。

けれども、イエス様の新しい秩序は続きます。イエス様は、「医者に必要なのは、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」と言われたのです。これは新しい秩序です。解放者の権威による新しい世界です。罪人を悔い改めさせるために、罪人といっしょになるという秩序であります。私たちキリストの教会が、キリストの権威を身にまとう新しい秩序の最先端にいます。罪人が、まだ神を知らない方が悔い改めているでしょうか？罪を悔い改める共同体となっているのでしょうか？

そして断食のことについても、弟子たちが断食をしないということでパリサイ人と律法学者が言っていて、それに対する答えとして、新しい着物に古いつぎはぎが使えない、新しいぶどう酒を古い皮袋の中には入れられないという比喻を用いられました。古いものが新しいものを受け入れられないということです。これが私たち全てのものが受けている神からの呼びかけです。古きもの、自分がこれだとして、しがみついているものを捨て、聖霊による、イエスの権威による新しい働きに自分を服従させます。

その文脈の中で、二つの安息日事件が起こります。パリサイ人と律法学者によって、これは決して譲ることはできないとした、自分たちのアイデンティティーとしていた律法の解釈をイエス様が完全に無視されたからです。

1A 弟子たちの穂摘み 1-5

6:1 ある安息日に、イエスが麦畑をとおられたとき、弟子たちは麦の穂を摘んで、手でもみ出しては食べていた。6:2 すると、あるパリサイ人たちが言った。「なぜ、あなたがたは、安息日にはしてはならないことをするのですか。」6:3 イエスは彼らに答えて言われた。「あなたがたは、ダビデが連れの者といっしょにいて、ひもじかったときにしたことを読まなかったのですか。6:4 ダビデは神の家にはいって、祭司以外の者はだれも食べてはならない供えのパンを取って、自分も食べたし、供の者にも与えたではありませんか。」6:5 そして、彼らに言われた。「人の子は、安息日の主です。」

パリサイ人が指摘している、安息日の違反というのは何なのでしょう？律法にはもちろん、六日働いて七日目に休みなさいという命令を主が行われました。仕事を休むというのは、何をすることなのか？ということを経法学者たちは、ユダヤ人が共同体の生活をしていく中で解釈し始めました。それを口伝律法といいます。ミシュナと呼ばれますが、そこには、麦の穂を摘んで、手でもみ出すことが、打ち場で脱穀をして、風に殻を飛ばす行為であるとしたのです。

しかし弟子たちのしていたことは、彼らが福音宣教の中でイエス様といっしょに忙しく動いていて、食べる暇もなかった、また与えられていた糧食が少なくなっていたという事情がありました。むしろ、これは律法にかなったことでした。「隣人の麦畑の中にはいったとき、あなたは穂を手で摘んでもよい。しかし、隣人の麦畑でかまを使ってはならない。(申命記 23:25)」

そこでイエス様は、ダビデのことを取り上げられます。サムエル記第一 21 章の話です。読んでみます。「ダビデはノブの祭司アヒメレクのところに行った。アヒメレクはダビデを迎え、恐る恐る彼に言った。「なぜ、おひとりで、だれもお供がないのですか。」ダビデは祭司アヒメレクに言った。「王は、ある事を命じて、『おまえを遣わし、おまえに命じた事については、何事も人に知らせてはならない。』と私に言われました。若い者たちとは、しかじかの場所で落ち合うことにしています。ところで、今、お手もとに何かあったら、五つのパンでも、何か、ある物を私に下さい。」祭司はダビデに答えて言った。「普通のパンは手もとにありません。ですが、もし若い者たちが女から遠ざかっているなら、聖別されたパンがあります。」ダビデは祭司に答えて言った。「確かにこれまでのように、私が出かけて以来、私たちは女を遠ざけています。それで若い者たちは汚れていません。普通の旅でもそうですから、ましてきょうは確かに汚れていません。」そこで祭司は彼に聖別されたパンを与えた。そこには、その日、あたたかいパンと置きかえられて、主の前から取り下げられた供えのパンしかなかったからである。(1-6 節)」レビ記において、供えのパンは週ごとに取り換えることになっています。そしてそのパンは祭司が聖所で食べることになっています。したがって、祭司ではないダビデが食べることは、あってはならないことのはずです。しかしアヒメレクは与えました。なぜなら、今、差し迫った生活の必要を満たすことのほうが、儀式における掟より大事だということなのです。

イエス様は新しい秩序をもたらしましたが、それは決して古い律法に反対するものではありません。むしろ古の預言者によって、神の律法の意図から離れ儀式だけを行っている彼らを叱責している言葉がありました。「わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえより、むしろ神を知ることを喜ぶ。(ホセア 6:6)」律法を解釈する時に、憐れみや誠実という神のご性質から離れた形での解釈は、どこかで間違っていることを知らなければいけません。むしろ、神の御言葉が生きた形で、私たちの心に入る時に、神の新しい御霊の働き、神の憐れみと恵みの働きとして私たちに与えられるのです。これがイエスが権威をもって私たちに臨まれる時に起こることです。

そしてイエス様は、「人の子は、安息日の主です。」と言われました。「人の子」という呼称は、福音書の中でイエス様が何度も使われている、キリストを指し示す言葉であります。先ほどの、「人の子が来たのは罪を赦すためである」というのもそうでした。これをずっと使い続け、マタイ 26 章 64 節には、大祭司カヤパの前で、「人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るようになります。」と言われたのです。これはダニエル書 7 章に出てくる預言です。人の子が戻ってこられて、諸国の権力をことごとく打ち砕き、神の御国を立てられることを預言したものです。しかし、「人の子」はエゼキエルにも主が使われた呼称であり、人間の子という意味合いもあります。したがって、イエス様はキリストであることを主張しながら、なおのこと人として自分はこの地上で生きているのだ、ということを書き表しておられます。

この方が「安息日の主」であります。つまり、安息日は神に対して守る掟ですが、その神はわたし自身だ、ということです。安息日に何を行なうべきか定めているのは、このわたしであるということです。

ですからイエス様は、安息日に何をしなければいけないかをご自分でお決めになることができます。ここから私たちは、しばしば陥る律法主義への戒めを読むことができます。つまり、聖書の字義に熱心になるあまり、あるいは教会においてしなければならないことに熱心になるあまり、キリストご自身が主であることを忘れてしまうことがあります。主なる神がおられて、ゆえにイスラエル人が安息日を守るように、キリストが主であり頭であられるから、私たちは命令を守るのです。私たちは常にキリストが主であることを認めて、この方にゆだねていき、自分が主ではないことを気をつけていなければいけません。

2A 右手の萎え 6-11

6:6 別の安息日に、イエスは会堂にはいって教えておられた。そこに右手のなえた人がいた。6:7 そこで律法学者、パリサイ人たちは、イエスが安息日に人を直すかどうか、じっと見ていた。彼を訴える口実を見つけるためであった。6:8 イエスは彼らの考えをよく知っておられた。それで、手のなえた人に、「立って、真中に出なさい。」と言われた。その人は、起き上がって、そこに立った。6:9 イエスは人々に言われた。「あなたがたに聞きますが、安息日にしてよいのは、善を行なうことなのか、それとも悪を行なうことなのか。いのちを救うことなのか、それとも失うことなのか、どうですか。」6:10 そして、みなの方を見回してから、その人に、「手を伸ばしなさい。」と言われた。そのとおりにすると、彼の手は元どおりになった。6:11 すると彼らはすっかり分別を失ってしまって、イエスをどうしてやろうかと話し合った。

右手の萎えた人の話です。イエス様が会堂で安息日に教えておられた時に、彼らはわざと右手のなえた人をそこに置きました。非常に興味深いですが、パリサイ人たちは右手のなえた者をイエスが治すということを彼らはすでに認めていました。それだけ、イエスが奇跡を行っていたことは明らかでした。反対者でさえ認めているのですから、疑いの余地はありません。そしてイエスが奇跡

を行なうことを彼らは認めていながら、なおのことイエスに対して腹を立てていました。安息日におけるしきたりが、いかに人を盲目にさせているかがここからわかります。

そしてイエスは、彼らの考えを知っておられて、なおのこと手を伸ばす奇跡を行われました。イエス様は、地上の秩序の中にあるいかなるものであっても、それがご自身の新しい働き、メシヤとしての人を救う働きに対抗するものであれば、それは無視してご自身の権威を行使されます。覚えていますか、ダニエルが、メディア王以外のものに礼拝を捧げたら獅子の穴に投げ込まれるという法令に署名がされたことを知って、そして自分の家でいつものように神に感謝を捧げて、祈ったのです。

イエス様は、善を行われることを選ばれました。しかも密かに行なったり、安息日が終わるまで待たれたのではなく、すぐに、公にそのことを行なわれました。律法の目的である憐れみをしめすこと、ご自身のメシヤとしての使命である、捕らわれ人を解放すること、この目的に対して、公に速やかに応答されたのです。これは秩序の問題です。イエスが安息日の主であります。彼らではありません。これからイエス様は、使徒たちを遣わす時にご自分を公に告白することを教えていかれます。決して、恥だと思って隠したりしないこと、公にすれば聖霊が言葉を与えられることを教えられました。

そして安息日は、善を行なうことであるという、どこかの特定の律法の箇所を出すまでもなく、全体に流れている原則を語られました。ここが律法主義の恐ろしいところです。神のことに熱心であっても、いつの間にか神の義ではなく、人間の義に陥ってしまいます。これは、キリスト教会においても起こります。神学や教理のことであるとか、教会のあり方、宣教方法、いろいろなことで、正しいことを話しているようで、実は自分たちに理解できるように人々に要求していくことがあります。この時にはすでに神のために行っているのではなく、自分のために行っているのです。

そして主は手を伸ばしなさい、と言われました。ここに主の教えにある権威が再び現れています。命じられたことに応答するならば、その命じられたことを守り行なう力を主ご自身が与えられます。信仰によって応答する時に、それに従うことができるための力をも神は下さるのです。

最後に、「すると彼らはすっかり分別を失ってしまつて」とあります。これは、単に非常に怒つたというものではありません。それ以上の憤りです。つまり、自分たちの存在の核になっている、アイデンティティーとなっているものを打ち壊されたゆえに、怒っています。これが、しきたりを破ることによって起こることです。イエスの権威による新しい秩序、神の国は、必ず古いしきたりとの激しい確執をもたらします。

私たちには、この日本社会における行儀作法があります。しきたりがあります。キリストを受け入れ、この方を主としていくことは、そのまま私たちの生き方の骨格になっている古い秩序に抵触し

ます。パリサイ人たちのように、分別をすっかり失っておかしくない状態に陥ります。したがって、私たちには神の恵みが必要です。自分たち以上に、神が自分を呼ばれて、その召し出しがなければ、私たちは古いものを捨てることはできません。そして神の呼び寄せによって、初めて真理の光の中に自分が行くことができます。